

自分から喜んで始めたことなのに、いつしか何で自分がしなければならないのかとか、感謝のことばもないとか、そこまでしなければならないの？と思ってしまうことが私たちにはあるでしょう。あるいは、自分が重荷を持って取り組んでいるところに、別の人がある方法で関わることを喜ばないことが私たちにはないでしょうか。そのような態度のもとにあるのはどんな思いでしょうか。自分のしていることを認めてもらいたいとか、自分の願い通りにしたいという思いではないでしょうか。そして、そういう自分の根本にある思いに気づけずにいることもあるでしょう。

## 1. 上に立とうとする二人に（：20～23）

ゼベタイの息子たち、ヤコブとヨハネの母親が息子たちと一緒にイエス様のところに来て、ひれ伏して、願いました。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるように、おことばを下さい」。ずいぶん大胆な願い、ずうずうしい願いとも思えます。〔

また、この願いは母親だけの願いだったのではなく、ヤコブとヨハネの願いでもありました。彼らがそのように願ったのは、少し前にイエス様がお話しになったことばに触発されたのでしょうか。19 章 27～28 節。

イエス様が語られている神の国、新しい世界とはこの地上の国家のことではありません。でも弟子たちにはまだそのことが分かっていません。イエス様が王として国を治める時には、王に次ぐ地位に着かせて欲しいと願ったのです。

イエス様は答えられました。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか」。イエス様が飲もうとしている杯とは、これから向かわれる受難のことです。この出来事の直前に、イエス様はご自分が受ける苦難について予告していました。17～19 節。

イエス様がこんなに詳しくご自分の受難について語ったのに、弟子たちはそのまま受け止めることができなかつたようです。十字架で死んで三日目によみがえるとははっきり語ったのに、それを文字通りの事実としてではなく、何かの比喩とか象徴的な表現と受け止めたのでしょうか。それで、イエス様が受ける苦難を弟子として共に受けることができるかという問いに対して、二人は「できます」答えました。

この時はまだ二人は分かっていませんでしたが、後にキリスト者たちへの迫害の中で、彼らはイエスの弟子として確かに苦難を受けることとなります。ヤコブは使徒たちの中で最初の殉教者になりました。ヨハネはパトモス島に流刑になりました。イエス様は「あなたがたはわたしの杯を飲むこととなります」と言われます。

彼らが信仰のゆえに迫害され、苦しみを受けることは父なる神様の許容されたこと、備えられたことでした。同じように、イエス様の右と左に座ることも、父なる神様が定め、備えておられるのです。そして、イエス様は父なる神様のみこころに従い、十字架に向かい、受難を通して後に、御国の王座に着くことになるのです。

それにしても、イエス様をご自身の受難を予告したすぐ後に、ヤコブとヨハネと彼らの母親がイエス様に願ったことは、対照的で、落差があったことを知らされます。イエス様は父なる神様のみこころに従い、救い主としてご自分の死に向かって行かれるのに対して、彼らは自分たちの立身出世を求めているのです。

でも私たちも彼らのことを責めることはできません。私たちも自分の栄光、自分の祝福を求めているのではないのでしょうか。

## 2. 怒るほかの十人にも（：24～27）

ヤコブとヨハネがイエス様にそんなお願いをしたことを知ったほかの 10 人の弟子たちは腹を立てました。彼らが腹を立てたということは、彼らにも自分こそ偉くなりたいという思いがあったからでしょう。

イエス様はそんな弟子たちにお話しになりました。25 節。この世の人々の態度はこうです。人々の上に立とうとし、権力をふるおうとしています。権力を握って高慢になったり、権力を持たずに卑屈になったり、権力を巡って争ったり、出し抜いたり、そういう状態に縛られています。

しかし、イエス様の弟子たちはそういう縛りから自由でなければなりません。26～27 節。当時の社会の最も低い地位である「仕える者」、「しもべ」となるように、同じ仕える者、しもべ同士の中でも皆に仕えるしもべ

となるようにと、イエス様は弟子たちに教えました。弟子としてのあり方を教え、またそのことで弟子たちに自分の罪深さに気づくように促したのでしょう。

自分の思い通りに周りを動かそうとし、その領域を広げようとするのではないのでしょうか。あるいは、そうできないと分かると逆に関わりをやめて無関心になることはないのでしょうか。家庭においても職場においても教会においても、この世の人々とは違い、あなたがたの間では「皆に仕える者」「皆のしもべ」になるようにと教えています。

### 3. 主イエスの使命（：28）

イエス様はそのように教えただけでなく、ご自身の愛によって弟子たちを悔い改めに導き、ご自身の態度によって弟子たちに模範を示されました。28節。

このことが神の御子が人となられた最大の使命です。神の御子であり、世界の主、王の王であるイエス様がこの世に来られたのは、人々を思い通りに支配するためではなく、むしろ人々に仕え、人々を罪から救うためにご自分のいのちを与えるためでした。

イエス様は「贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来た」と言われます。「贖いの代価」とは、奴隷を解放するために支払われる代金です。イエス様をご自分のいのちを代わりに支払って、多くの人を奴隷から解放するというのです。どういうことでしょうか。

人は皆、罪を持って生まれて、生きていながら実際に罪を犯しています。神なんかいないと言い、神を無視して生きています。その結果、罪に対するブレーキを失っています。自分の思いのままに行動しています。自分の都合の良い神を考え、自分の欲望が神のようになっています。そして、罪を犯したくないと思っても罪を犯してしまいます。まさに罪の奴隷となっています。

そのような罪の奴隷となっている私たちを解放するために、「贖いの代価」としてイエス様はご自分のいのちを与えてくださいました。それが十字架での死です。みことばに「罪の報酬は死です」とあるように、罪の結果は死と永遠の滅びです。しかし、その罪から人を救うために、イエス様が人の罪を代わりに負って刑罰を受け、死なれたのです。その救い主イエス様の贖いの死を信じ受け入れる人を、神様は罪を赦し、生かしてくださいます。罪の奴隷から解放してくださるのです。

イエス様は忍耐深く、弟子たちを教え、ご自身の使命を伝え、十字架に向かって行かれました。イエス様の十字架は弟子たちのためでもありました。そこに、主イエス様の愛が表されています。自分のいのちを与えるほどの愛です。その愛は私たちにも与えられています。その愛を受け入れるときに、私たちも自分の罪を示され、悔い改めに導かれます。そして、イエス様の十字架が私の罪のための身代わりであったことを受け入れるとき、神様は私たちの罪を赦して、私たちを罪の奴隷から解放してくださるのです。

罪の奴隷から解放されて終わりではありません。主イエス様は救われた者に新しい生き方を示しています。弟子たちにご自分と「同じようにしなさい」と主は言われます。

イエス様は、罪を除いては、私たちと同じ人になってくださいました。言い方を変えれば、罪のない完全な人として来られたのです。仕える者となられ、いのちまで与えたというイエス様の生き方は、人の本来の姿なのです。イエス様によって救われた人は、新しいいのち、永遠のいのちに生きるのです。神を愛し、互いに愛し合う、人の本来の生き方ができます。イエス様の弟子たちは神を礼拝し、皆に仕えて生きることができるのです。文字通り自分のいのちを捨てることはなくても、イエス様を信じて救われた者は、自分を捨て、自分の願いや主義主張などを捨てて、神のみこころに従い、神と人に仕えることができるのです。

御国の王であるイエス様がこの世に来られたのは、仕えられるためではなく、皆に仕えるためでした。多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるためでした。十字架を見上げましょう。罪のないイエス様があなたのために、私のために十字架にかかり、贖いの代価となられました。イエス様の愛を受け取り、救い主イエス様を信じましょう。

また、いのちを捨てたイエス様によって救われた私たちも、自分を捨てて歩み、自分を与えて歩むことができます。家庭において、職場において、教会において、イエス様の姿を思い、皆に仕える者になりましょう。